新田次郎全集

第十巻

新田次郎全集 10

火の島・火山群

新潮社版

火の島・火山群
新田次郎全集第十巻

昭和四十九年七月二十五日発行
昭和四十九年十月　十　日二刷

定価九五〇円

著　者　新田次郎

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

東京都新宿区矢来町七一〒162　振替東京八〇八
電話業務部03(266)五一一一編集部(266)五四一一

印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

火の島 5
＊
孤島 145
毛髪湿度計 183
火山群 213
ガラスと水銀 251
虹の人 277
桜島 317
解題 362

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

火の島・火山群

火の島

第一章

南寄りの強い風だった。

一定風速で重い空気をおしつけて来るような、あの台風特有の吹きかただった。風は鉄の防風雨戸をたたき、壁にそって、庁舎の北側に廻っていき、なにかを吹き倒した。

風はときどき息をついた。息のつき方が一時的にせわしくなり、やがて一定の風速に落ちつくと、しばらくはまたやかましく防風雨戸をゆすぶった。

房野八郎は観測野帳を手に持って、雨戸の隙間から外を覗いた。外は真暗だった。雨戸の隙間から洩れる明るさの中を、水平に横切っていく雨粒の流線が見えた。雨はたいしたことはなかった。風が問題だった。彼はその風を三十メートルぐらいと推定してから風速計の指示目盛りを覗きこみ、風速が二十八メートルであることを確かめると、彼自身の推定に満足したような顔で、大きく顎をひいてから、雨戸をしっかりしめて、外へ出る支度をはじめた。

観測室の出口で、新免春治が外に出ようとしている房野八郎にご苦労だねと声をかけた。

房野八郎と新免春治は肩を並べて、ほんのちょっとの間、外を見て立っていた。房野は時計を見た。二十時を過ぎるところだった。房野は、防風頭巾を手でおさえて、格好を直すと、風の中へ身投げするようにして、出ていった。風雨にたたかれている暗闇の大地の上を静かに動いていく提電灯の光が見えた。

房野八郎は強風の中を百葉箱（気象器械を収容してある箱）に向って這っていった。風に湿気を感じた。海を渡って吹いて来るねばねばしたなま暖かい風が、房野の顔をなでた。雨粒が痛かった。強風が彼の口をふさごうとした。彼は、首をひねったり、両腕をたくみに使ったりして風をよけた。風は強いが比較的に雨が少なかった。砂のにおいがした。毎日嗅いでいる砂のにおいだが、砂の上に這ったまま嗅ぐ砂のにおいはまた別なにおいがした。刺戟性の臭気を放つ火山地特有のにおいだった。

砂が風に吹きとばされて彼の眼や口を襲った。

（いまにはじまったことではない）

彼は、口に入った砂を舌の先で外へ押し出しながら考えた。きのうきょう、この島へ来たのではない、昭和二十三年、鳥島気象観測所開設以来おれはこの島へ少なくとも年

に一度か二度は来ているのだ。房野八郎は自分にそういった。台風でとばされた砂の味だってめずらしいことではなかった。誤って嚙んだ砂を吐き出すと、また砂のにおいがした。むっとするようなにおいだった。

「ヘンだな」

と彼は風の中でつぶやいた。そのにおいがヘンだというのではなく、いつになく、ヘンだなといったつもりだった。

百葉箱のまわりにだけ芝生が植えてあった。その僅かばかりの草地まで来たところで彼はひといきついた。ヘンなにおいはそこではもう感じられなかった。

彼は百葉箱に寄りそうようにして立上って、揚げぶたをあげて、器械の目盛りを読み取って、それを野帳に記入した。嵐の中においても、彼の動作は一種の節度とリズムを持っていた。彼の身体は素直に屈曲した。温度計の目盛りに光を当て、その目盛りを頭に覚えこみ、それを数字として紙の上に書きこみ、さらに次の計器と対面するという動作をつづけながらも、彼の神経は風に対してアンテナを張っていた。風に構えをなしていた。

観測が終ると、彼はまた這った。切迫感はあったが恐怖はなかった、暗夜だから方向を間違えて、海側の断崖の方へ這っていきはしないかというような心配もしてはいなかった。ただ、帰りは、風に頭を向けるような格好になるから、行きよりはつらかった。まともに砂が吹きつけて来るときは、眼をふさぎ、呼吸をするのさえ遠慮がちに、虫のように砂の上に這いつくばっていなければならないことがあった。

房野八郎が強烈な異臭を嗅いだのは彼の顔が、海側、つまり、断崖の方を向いたときだった。砂のにおいであることに間違いなく、いわば、この鳥島の体臭のようなものであったが、強すぎた。思わず、顔をそむけるほどのにおいだった。どこからそのにおいがやって来たのかは分らなかった。風が運んで来たには違いないけれど、においのかたまりをそっくりそのまま、どこからか持って来て彼の鼻先につきつけたようで不愉快だった。

その悪臭は亜硫酸ガスのにおいであり、頂上の噴気孔のあたりで嗅ぐことのできるにおいだったが、観測所の付近にはないものだった。

「ヘンだな」

彼はまたつぶやいた。この島が火山であり、島をおおっている岩石がすべて、ごく近い過去の噴火によって形成されたものであるから、あらゆる地物にそのにおいはついていた。においがないことの方がヘンであり、においがあってこそ平常だと考えればヘンではなかったが、彼の鼻孔をついた強烈さはやはりヘンであった。風のいたずらとして

もヘンであったし、観測所の近くに、その臭いの源が突然出現したとなると、それは単にヘンだとして見逃すわけにはいかなかった。

現象を一応ヘンだと考えることは気象観測者の心構えのようなものであった。ヘンな現象を発見して、それを正確に読みとるのがその任務であるといったふうな使命感が、彼にヘンだと感じさせたのではなく、そういうことはもう、よく馴らされた猟犬のように、身についている、いわば武芸者の構えのようなものであった。

ヘンだと感じた以上、ほって置くわけにはいかなかった。彼は、ヘンなにおいのして来た方に向って頭を持ち上げた。観測室から洩れて来る一条の光のほかはなにも見えなかった。這ったままで、首を左にひねって見上げると、そこには、鳥島の外輪山を形成する月夜山が見えるはずだった。厚い雲におおわれて、なにも見えなかったが、彼は、彼の網膜に、はっきりと焼きついている月夜山を見た。なんの変哲も、潤いもない砂山が、夜目には故郷の山に見えることもあった。月夜山の北側に本土があり東京があり、一日も早くそこへ帰りたいという、望みが、きっかけのあるごとに彼の眼を月夜山の頂に投げさせていた。月夜山のあたりに明るさがあった。紅を水に溶かしてうすめたような色だった。うすめても尚、紅の色を感じさせるほどの薄さに、雲は染められていた。

「ヘンだぞ」

彼は言った。そして瞬いた。気象観測者はヘンなものを見つけることと、見つけたら一応はそのヘンなものを疑うように習慣づけられていた。房野八郎は、彼の眼が、現象に対して客観性を持たせる用意ができるまでその現象にふたをしたのである。

鳥島観測所のどこかの部屋から洩れる光がなせる業かとも思った。彼は視界の範囲内にその現象をとらえこんだまま、他のあらゆる対象物を探った。

光は消えた。もとの暗闇となった。しばらく待ったがその光は現われなかった。

彼は強風の中に伏せたままで、彼が見た変な光を、はっきりと彼の頭に記録しようとした。暴風雨の中で、そのことを記録することは困難だったから、観測室にかえってから、その現象を要領よく記載して置かねばならないと思った。月夜山の上空をそめた薄紅色は彼が子供のころ白骨温泉から、夜空に映る焼岳の噴煙を見たときの色とよく似ていた。房野八郎はそのとき十三歳だった。彼は、父の手を汗の出るほどしっかり握ってその夜景を見詰めていた。怖いと思ったが、彼はそれを唾とともに飲みこんだ。噴火についてまだ分る年齢ではなかったし、ましてまともに、噴火の灰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

をかぶったことのない彼だったが、その時はこわいと思った。噴火のおそろしさではなく、その薄紅色に染まった空色が、美しいとは見えず、こわいと彼には見えたのだった。

そのときの空の色と恐怖が、突然よみがえって来たことで彼はひどく狼狽した。彼はしばらくそこにじっとしていた。心を落ちつけねばならないと思った。待っていても、二度とその光は現われなかった。錯覚とは思いたくなかった。この眼ではっきり見たのだと自分にいい聞かせても、空は、彼の見たことを否定するように暗かった。

観測室の入口で、提電灯を振るのが見えた。新免春治が心配しているのだなと思った。房野八郎は、提電灯をふってそれにこたえてから、ゆっくりと這い出した。それまで気にならなかった風の音が一度に耳に入って来た。接近しつつある台風のことが房野の頭にひっかかった。

雨具の頭巾で頭がすっぽりおおわれていたから耳はよく聞えなかった。頭巾の向いた方の音だけが聞えるので、その夜の暴風雨の音とはやや違ったかたちで聞えていた。あらゆる方向の音が混然として聞えて来るのではなく、頭巾の向きに指向性を持っているから、表面的には、頭巾の向いている方角から、暴風雨がつくり出すあらゆる物音が聞えて来るのだ。それでも彼は、その頭巾の中に入って来る音が、頭巾の向いている方から来たものか、まわりこんで来るものかのおおよその見当はつけられた。彼ではなくても、そんなことは、誰でもできることであったが、ただ彼と彼の同僚以外にはできないことは、この混然とした音の中から海の音を濾過(ろか)して聞くことだった。海の音には周期があった。風のようにでまかせな音を立てずに、あるきまった法則に従って、海は鳴った。海鳴りによって、彼は押し寄せつつある台風の消長を彼なりに予測した。それが彼の勘に類するものか、或いは古来からある観天望気に類するものか彼にもよく分らなかったが、彼には彼なりに、その音によっての判別は結構的中すると考えていた。

海鳴りは一時間前と少しも変らなかった。音の周期も高さもほとんど違ってはいなかった。ひょっとすると台風は進行をためらっているかも知れない。鳥島にまともに向って来ると予報されている進路を或いは変えたのかも知れなかった。

彼は断崖にそって吹き上げて来る海の音に頭巾を向けて、もう一度その音を確かめようとした。

人の声を聞いた。風に吹きちぎれてことばにはならなかったが甲高い叫びに似た声だった。

彼はすぐその声が庁舎の中からのものではないと思ったが、しばらくの間をおいて、はっきりと断崖のあたりにその声を聞くと、そこに人がいることを疑わなかった。

「助けてくれ」
三度目の声は言葉をなしていた。
彼は声の方角に提電灯を向けたが、人の姿は見えなかった。
「どうかしたのか」
観測所の方で新免春治が怒鳴った。新免にもその声が聞えたのだ。新免は、その声を房野が放ったものだと思っているようだった。
「人の声がするぞ」
房野は新免に向っていうと、人の声の方に向って、起き上ろうとした。背をかがめて歩いていこうとしていけないことはなかったが、そうするよりも這っていったほうが、やはり、安全で、しかも速かった。房野は背後の庁舎内で、多分大騒動が始まっただろうと思った。台風来襲中の暗夜に人の声がしたことは、なにか容易ならぬ事件がもち上る前兆のような気がした。
声は四たび聞えたが、その声は小さかった。房野は、その声のところに、もうすぐ提電灯の光がとどくところまでいって、後ろをふりむいた。三つの光が大地を這いながら近よりつつあった。房野は安心した。
「誰だ、どうしたのだ」
房野は黒い物に声をかけた。黒い物の中で顔だけが上下に動いていたが声はなかった。顔中血だらけになった男がそこにあえいでいた。丸首シャツの上に、皮のジャンパーを着ていた。
(船乗りだ)
と房野は判断した。
男は、全精力をふりしぼって、頭を持ちあげようとしていた。
「助けて下さい、あと二人いる——」
男はそういった。男の眼が、その時、きらっと光ったが、次の瞬間には眼を閉じて、前につんのめったまま動かなくなった。
「安心して気を失ったらしい」
房野はあとからやって来た所員たちにいった。
「ひとりか」
「いやあと二人いるといった」
房野はたいへんなことになったと思った。この暴風雨の中を、遭難者をさがしに海までおりていくことはとてもできないだろうと思った。
房野の頭に海上から見た鳥島の全貌が浮んだ。島は黒い絶壁をめぐらせていた。島の西側だけがゆるい傾斜地で、そこから断崖を縫うようにして登る道があった。その道を登って来る以外に観測所へは来られなかった。夜、歩ける

道ではなかった。まして提電灯なしで登れるところでもなかった。

（どこをどうして登って来たのだ）

房野はその男に聞きたかったが、その男は動かなかった。

男は庁舎に運びこまれると、まず濡れた衣類を剝がされ、毛布に包まれた。呼吸はしていたし、心臓も動いていた。額と頬の傷はたいしたことはなかったが、足に、一箇所深い傷を負っていた。傷口を消毒して包帯しても、血は包帯を赤く染めた。

ザイルに身体を結びあって、庁舎の周囲を見にいった者が帰って来た。

男が突然呻き声をあげた。そして眼を見開いた。

新免春治があらかじめ用意して置いた水を飲ました。

「二人はどこにいる」

男はいった。二人はどこにいるんです二人は、そういって男は毛布をはねのけて起き上ろうとした。

「騒ぐな、落ちつけ、どこで遭難して、どうして、ここまで這い上って来たかをいうがいい」

房野がいった。

「すみません」

男はそういって、もういっぱい水を下さいといった。水を飲ませると、やや落ちつきを取りもどしたようだった。

「港へ船をよせようとしたのです、一人は泳いで渡り、岩の上に立ったと思ったら、波をくらって流され、船にいた私ともう一人は、船がひっくりかえって海の中へ投げ出されたのです」

男は五十をすぎていた。いかにも海でたたき上げたような黒い顔をしていた。話のまとめ方から見て、房野は、多分この男が、船長だろうと思った。

「港ってどこのことです」

鳥島には港らしい港はなかった。だから船はずっと沖に停泊して、艀で近よるしか手はなかった。

「私はこの島の近くをよく通るので、観測所の人たちが使っている港を知っていたのです」

男はそういって、二人はどうしました。ね、どうなったか教えて下さいといった。

「すると、あなたはあそこから這い上って、ここまでやって来たのですね」

房野は念を押した。通称B港と呼んでいるところまでいけば二人の漁船員たちの消息は分ると思った。決死隊というほど悲壮感はなかったけれど、暴風雨の中を、足場の悪い岩根を伝わってB港までおりていくことは多分に危険なことだった。三人ずつ、二つの遭難救助パーティーが組織された。

打上げる波頭がB港をおおい、波頭は!! 壁を叩いていた。その岩壁を横断するようなかたちで夜半すぎまで捜索はつづけられたが、人かげらしいものは発見されなかった。夜半を過ぎて、風速はいくらか落ちた。台風がそれたのである。北西に向きを変えて進行すると予報された台風は、気を取直したように、頭を北に向けるとそのまま迷わずに北上した。鳥島の風は時間の経過とともに衰えていった。

朝が来た。台風の余波で海は荒れていたが、島からはもう嵐は去っていた。

徹夜で続行されていた遭難漁船員の捜索は朝が来てもおわらなかった。九時ごろになって、岩と岩の間に挟まっている若い男の死体が発見された。一度は打上げられたが、また波に引きずり戻されて、岩の間にはさまったものと思われた。頭部が割れていた。その一撃で、青年は息を引取ったかのように思われた。若い男はうつろな眼を開いたまま無表情だった。木庭友邦が若い男の眼を閉じてやった。若い男の死体のすぐそばに破損した船が打ちあげられていた。

若い男の死体が発見されたと聞くと助けられた男は声を上げて泣き叫んだ。

「おれが悪いんだ、おれが船長なんだからあいつのいうことなんか聞かずに、頑張ればおれたちはみんな助かったのだ」

船長は同じことを繰返した。

「あとの一人はどうしたんです」

船長は、見つからない責任が観測所員にでもあるかのような口の利き方をした。彼は何度か立とうとしたが、足の激痛のために、坐りこんだ。

「みなさんもう一度、探しに行ってくださいませんか、もう一人はどこかにきっと生きている、どっかの岩かげで、義足を撫でている。あいつは簡単に海で死ぬような男じゃあない、あいつはね、三度遭難して、三度とも、あいつひとりだけが助かったんです」

船長は所員たちの手をやたらに引張っていった。

「あとの一人の捜索は引続いてやっている。だから、船長、どうして遭難したか、始めからゆっくり聞かせて下さい。あなたの船が、故郷の港を出たときからのことを順序を立て、話してくれませんか」

所員がいった。

船長は何度かうなずいた。そして、涙があふれ出そうなほどの悲しい眼を所員の方に向けてから重い口調でしゃべり出した。

「船には三人の男が乗っていました。若い男と義足の男とそしてこの私の三人です。わずか七トンのちっぽけな船なんです」

船長は話しだした。

「台風が発生したらしいってニュースはラジオで聞いていましたが、丁度そのときは魚がいつになくよく取れますので、つい時間の経つのも忘れて、波が高くなってから台風の来襲をはっきり知ったのです」

船長はそこで声をおとして、

「若い男は、海がこわかったのです。生れてはじめての遠洋航海だから、無理はないと言えば無理がないが、あいつは、それからっていうものはラジオにかじりついたままなんです。気象放送の時間でもないのに、ラジオのそばを離れないんです。海を見ろといっても彼はラジオの前を離れませんでした。台風が北西に転向するらしいというニュースを聞いてからっていうものは、彼はもう気が狂ったようでした。彼は十六時の気象放送を聞いて天気図を書きました。その天気図の中心から北西方向に黒い矢を引くと、その矢がちょうどこの島のあたりになるのですが、私の船は、もうその時は鳥島の見えるところまで来ていました。絶対に台風は来ると彼はいうんです。来るかも知れない来ないかも知れない。来たって、風に舳先を立てて頑張りゃあ、なんとかなると私がいっても、若い男は、聞かないんです。七トンの漁船が台風に耐えられるわけがないっていうんです」

「天気図が書けるくらいだから気象にはかなりくわしかったのだろう」

所員がいった。

「なあに、漁業組合の天気図講習会を二週間ほど受けただけなんです。そんな知識で台風が来るの来ないのっていったってしようがないだろうというと、おれが来るといっているのではなくて、気象庁が来るといっているから絶対に来るのだと怒鳴るんです。十七時ごろでした。鳥島がだんだん大きくなって来て、観測所の建物と、建物につづく白い道が港までおりているのが見えるようになって来ると、若い男は突然、おれは鳥島へ上陸するから船を島へ寄せろって怒鳴り出したんです。時間的にいって、もし上陸するならば、日没までの三十分か一時間が勝負だというんです」

船長は彼をかこむ所員たちを見廻していった。

「死ぬのはいやだと怒鳴り散らして、しまいには私の持っている舵を奪おうとまでするんです」

「その時もう一人の男はどうしていたんです」

所員が聞いた。

「義足の男は、私といっしょになって、若い男の気を沈めようとしていました。この高波では、船を島へ寄せることはできないし、寄せたところで、泳ぎつくことはできない、波打ち際で岩に叩きつけられて死ぬに決っているからやめろといってやったんですが、若い男は聞かないばかりか、ついには私を人殺し呼ばわりするんです。無能な船長だというんです」

船長はちょっと言葉を休んで、

「ほんとうに私は無能な船長でした。なにを言ったって、聞いてやらなけりゃあよかったのですが、義足の男が、島へ船をよせましょう、若い男が死んだら死んだときだ、おれが証人に立ちますというものですから、船を港近く寄せました。ところが若い男はいざ海にとびこむ段になると、ひとりで上陸するのが気がひけるのか、それとも、親切心か分らないが、綱の束の端を持って、義足の男に、もしお前が上陸する気があるなら、おれはこの綱を持ってあの岸へ這い上り、陸からお前を引張ってやろうっていったんです」

「義足の男は泳げるんですか」

所員の不審そうな顔に船長は、

「義足の男はだいたいなんでもできる男でした。勿論泳げましたが、はやく走ることはできませんから、波打ち際のもっとも危険なところを、若い男が引張ってやろうっていったんです」

「しかし、それは無茶だ」

「無茶です、両足健全な若い男にだって、波打ち際を乗りこえられるかどうかというのに、義足の男が、いくら引張られても、それができるはずがないのです。ところがおかしなことが起きたんです。若い男にどうだと誘われると、それまで若い男を引止めていた義足の男がおれも島へ逃げるといい出したんです。ばかなことをと、私がとめようとしているうちに、若い男は、そのつもりになって、綱の端を腰に結んで海にとびこみました。若い男は、どうやら、波をかわして、海岸の岩の根子に取っつきました。やったぞと私は思いました。はやく逃げろと声を掛けたい気持でした。男は岩に這い上ると、腰のザイルをほどいて腕に巻きつけてそこに立上りました。そこへ大波がかぶさりかかったんです、若い男の姿を見たのはそれが最後でした」

船長は水をいっぱい飲んだ。

「私は舵をにぎっていますから、義足の男に、はやくザイルを引張れと怒鳴りました。急に舵が効かなくなりました。若い男の腕から離れたザイルが、船のスクリューにからんだのです。船は転覆して、私はあちこちを打たれて気を失いました。気を失っていた時間は十分かせいぜい二十分ぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.